1

逆説の詩語・断章

「悲しみ（悲しいという感情）」を
「悲しい」と表現したのでは文学にはならない
「悲しい」は詩的言語ではない
そこで「腸がずたずたになる」や「涙が涸れて血が流れる」といった表現が
「悲しみ」の象徴表現として考案される
しかしこれらの表現もクリシェ（ステロタイプ・ブロック）と化したとたんに詩的言語としての地位を失う
その時それを代替する新たな「悲しみ」の象徴表現が創出されるのである
そしてその新たな象徴表現の価値はひとえにクリシェとなりうる潜在性を有しているかにかかっている

でっ？

20161130

平成28年度第6回（通算第84回）
山口国際文化学研究会

現代典故論

山口県立大学大学院国際文化研究科
川口喜治

文章の二大要素

内容：何を書くか

修辞：如何に書くか

中国古典文学における二大修辞技法

典故　　対句

典故とは

昔の書物に見える言葉や事実、
あるいは歴史上の事実（＝故事）を
作品に読み込み、作品の世界を豊かにする。
あるいは、一つのことを言うのに、
古典のイメージまたは史実とだぶらせ、
読者に印象づけようとする方法。

典故は、それを知らなければ理解できない。一定の知識がなければ理解不可能であった。

典故の使用は、**読者が作者と同じ知識を持つ**ことを前提としている。

文学（識字能力）が**限られた世界**の「特権的所有物」「**伝統的知識人**階層の文学」であったことから成立した技法であった、と考えられる。

典故の出所（**出典・典拠**）は、**権威ある基礎的教養書**に、凡そ限定されていた。

例えば、『詩経』に代表される儒教の経典、孔子とその弟子の言行録『論語』、『史記』・『漢書』などの歴史書、『荘子』などの思想書であった。
唐代以後では、梁・昭明太子が編纂した『文選』が、詩作の教科書的存在であった。

伝統的知識人（士・士大夫・士人・文人・読書人）の家に生まれたら、幼い頃から、このような書物を暗誦する教育を受けた

9 典故の実例　杜甫「登兗州城楼」

登兗州城楼（兗州の城楼に登る）

五言律詩。河南・山東に放浪生活を送っていたころ、兗州都督府司馬の官にあった父の杜閑を訪れた折の詩。七四二（天宝元）年、三十一歳のころの作。

東郡趨庭日　東郡　庭に趨する日
南楼縱目初　南楼　目を縱ままにする初め
浮雲連海岱　浮雲は海岱に連なり
平野入青徐　平野は青徐に入る
孤嶂秦碑在　孤嶂には秦碑在り
荒城魯殿余　荒城には魯殿余る
従来多古意　従来　古意多し
臨眺独躊躇　臨眺して独り躊躇す

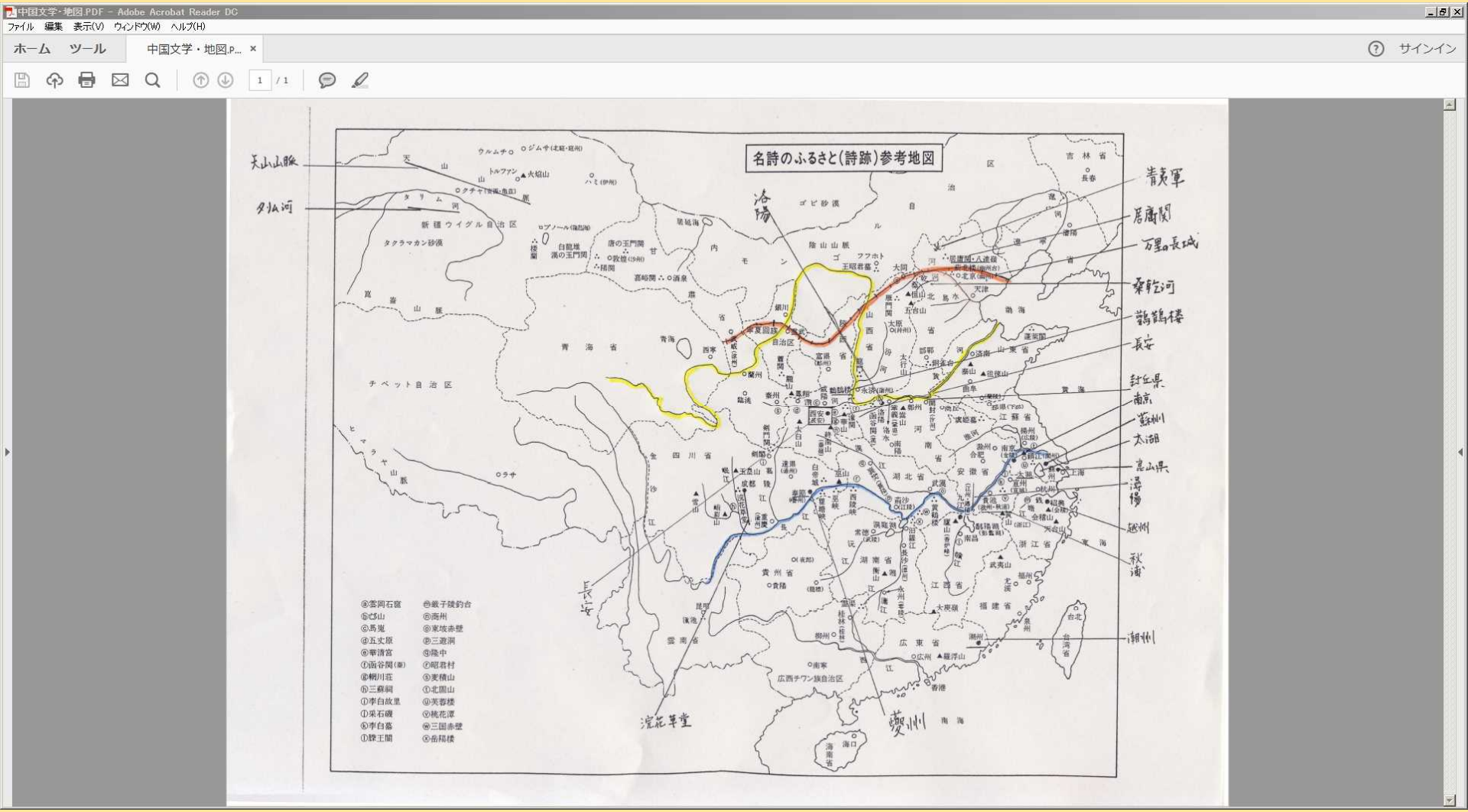
東郡の地で父の教えを奉じている日にあって、州城の南楼で眺めをほしいままにするその初めのときよ。空に浮かぶ雲は海や泰山のかなたにまでつらなり、平野は青州や徐州の方まで入りこんでいる。ひとりそばだつ屏風山には秦の始皇帝の石碑が今なお残っており、荒れはてた町には魯王の宮殿がそのあとをとどめている。これまで古をなつかしむ気持ちの多かったわたしは、城楼に登り立って四方を眺めながらひとりたち去りかねている。

○東郡　秦のときの郡名で、兗州はその郡に属していた。○趨庭　庭さきを走りまわる。『論語』季氏篇に、孔子の子の鯉が「庭を趨って」過ぎたとき、父の孔子が呼びとめて「詩」と「礼」とを学ぶようにさとしたとあるのにもとづき、子供が父の教えを受けることをいう。この『論語』のことばを使用するのは、兗州のすぐ東に孔子の故郷である曲阜があることによる。○海岱　東の海と東北にそびえる泰山のこと。○青徐　青州と徐州。ともに太古の九州の一つで、青州は兗州の北、徐州は兗州の南にひろがる地域をいう。『書経』禹貢篇に「海岱は惟れ青州」とある。○孤嶂　兗州の東南数十キロにある嶧山をいう。○秦碑　紀元前三世紀のころ、秦の始皇帝が巡幸の記念として建てた石碑。○荒城　兗州のすぐ東にある曲阜をさす。○魯殿　紀元前二世紀、漢の景帝の息子、魯の共王が建てた霊光殿をいう。○臨眺　高い所に登って遠くをながめる。○躊躇　躊躇。行くことをためらう。○韻字　初・徐・余・躇。

（黒川洋一『杜甫詩選』岩波文庫、1991）

陝西省西安市（長安）城壁と城楼

http://www.chugoku-kabu.net/modules/freepic/index.php?page=photo&lid=1&cid==1



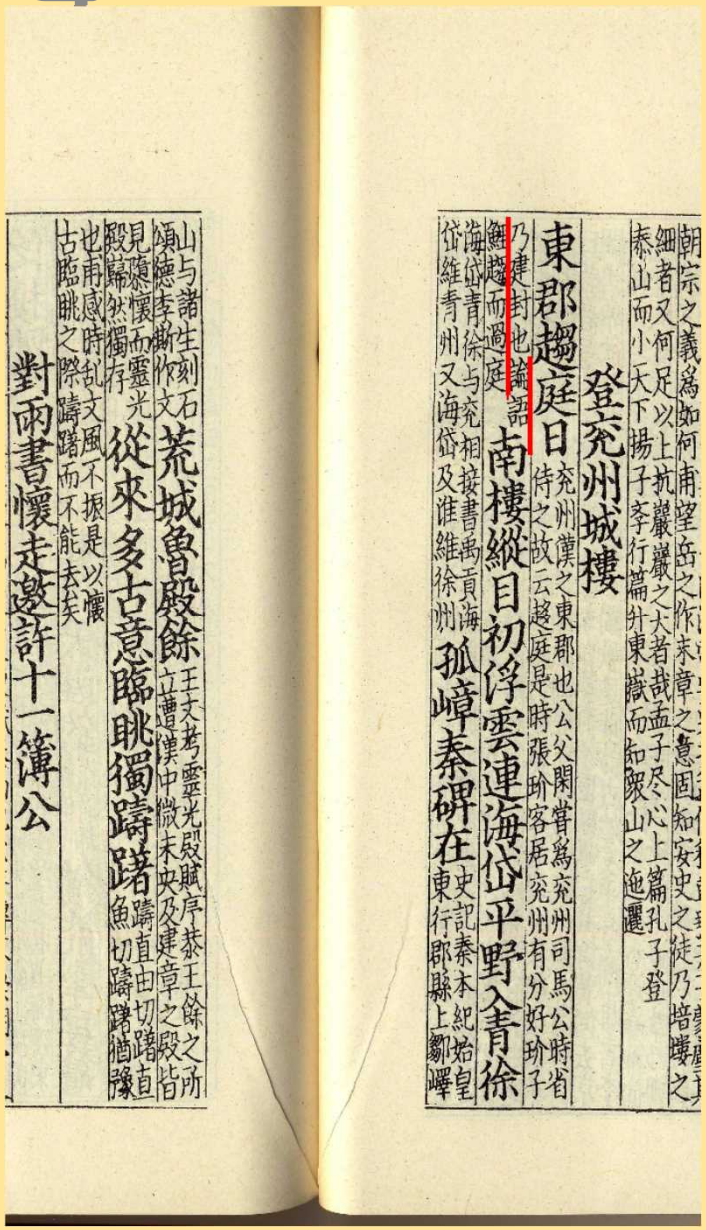
（松浦知久編『続校注唐詩解釈鑑賞辞典』大修館書店、2001）

大学入学当初、このような形式の中国古典詩の訳注に接した発表者は、驚嘆した！
当時の発表者にあっても容易に推測できた極めて膨大な中国の古典文献の中から、訳注者（研究者）は、いとも容易な筆遣いで、そのことばの出典を示して解説している。
何という博覧強記（この四字熟語を当時は知らなかった）であることか！
何か秘密があるはずだ！
知りたい。

中国文学を専攻する。

寿司

自分で
いちから
やってみる


朝宗之義爲如何甫望岳之作末章之意固知安史之徒乃培塿之
細者又何足以上抗巖巖之大者哉孟子尽心上篇孔子登
泰山而小天下揚子孝行篇升東嶽而知衆山之迤邐

登兖州城樓

東郡趨庭日兖州漢之東郡也公父閑嘗爲兖州司馬公時省
侍之故云趨庭是時張玠客居兖州有分好玠子
魯趨而過庭論語南樓縱目初浮雲連海岱平野入青徐
海岱青徐与兖相接書禹貢海
岱維青州又海岱及淮維徐州孤嶂秦碑在史記秦本紀始皇
東行郡縣上鄒嶧

山与諸生刻石頌德李斯作文荒城魯殿餘王文考靈光殿賦序恭王餘之所
立遭漢中微未央及建章之殿皆
見隳壞而靈光從來多古意臨眺獨躊躇躊直由切躇直
殿歸然獨存魚切躊躇猶豫
也甫感時乱文風不振是以懷
古臨眺之際躊躇而不能去矣

對雨書懷走邀許十一簿公

杜甫詩の注釈書

（南宋）魯訔・蔡夢弼
『杜工部草堂詩箋』巻一

宋代（近世社会）になると、
庶民階層が台頭し、
彼らが伝統的知識人階層に
参入することで、
知識人階層が厚みを増す。
結果、知識人の均質性が小さくなり
（格差が大きくなり）、
下層の知識人には、
『論語』「趨庭」の出典の注釈も
必要となった、ということか？

ともかく、論語の注釈の件の秘密が
解明され始めた。

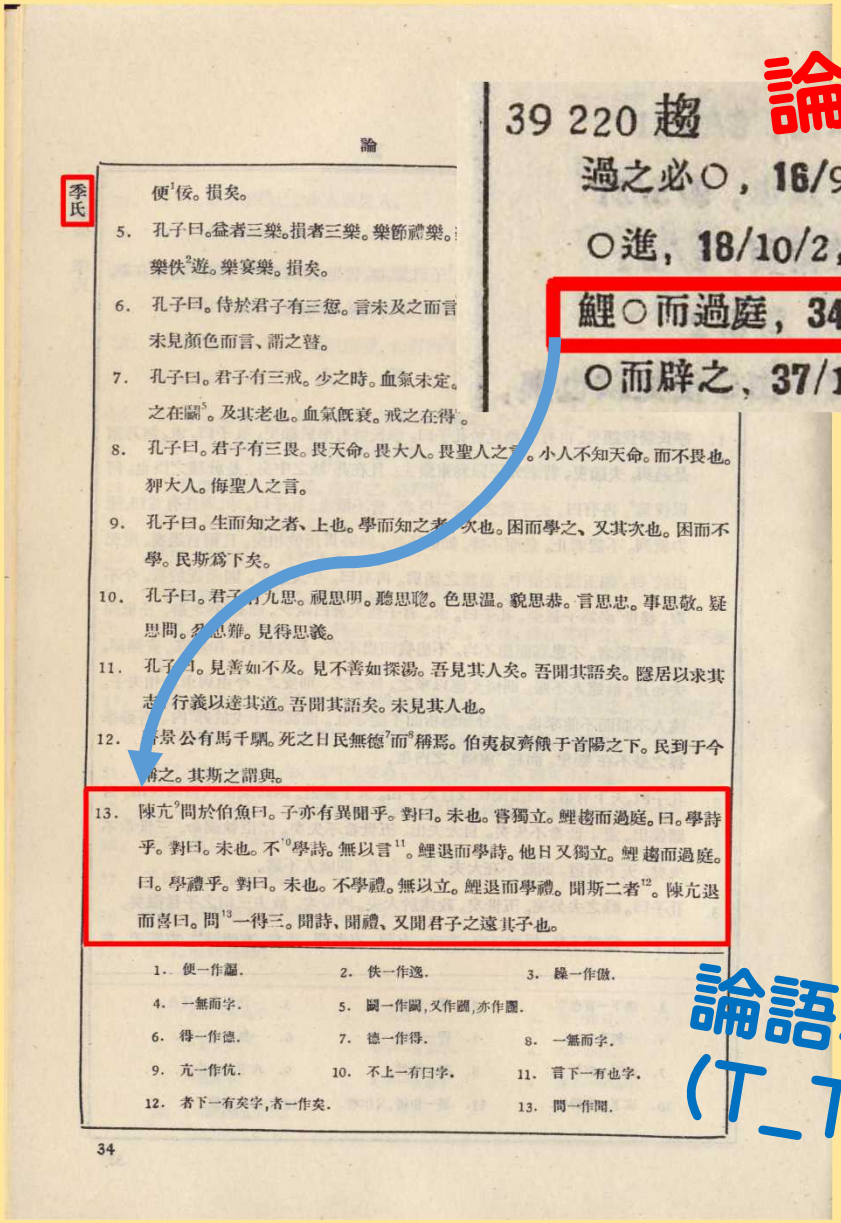
『論語』は中国古典の中では比較的文字数が少ない部類に属する書物ではあるが、
「論語鯉趨而過庭」と、前掲黒川『詩選』の注釈とは、まだ隔たりが大きい。
篇名（季子篇）、エピソードの全体が、未詳。
『論語』を最初から読み、「鯉趨而過庭」を探すのか？
全ての典故にこの作業をしていると、詩歌一首の解釈に膨大な時間がかかってしまう。

↓

必要は発明の母！

『論語引得』(哈佛燕京学社、1940)

論語の一字索引(^^)/~~~



論

季氏

便[1]佞。損矣。

5. 孔子曰。益者三樂。損者三樂。樂節禮樂。樂佚[2]遊。樂宴樂。損矣。

6. 孔子曰。侍於君子有三愆。言未及之而言。未見顏色而言。謂之瞽。

7. 孔子曰。君子有三戒。少之時。血氣未定。戒之在鬬[5]。及其老也。血氣既衰。戒之在得[6]。

8. 孔子曰。君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。小人不知天命。而不畏也。狎大人。侮聖人之言。

9. 孔子曰。生而知之者、上也。學而知之者、次也。困而學之、又其次也。困而不學。民斯爲下矣。

10. 孔子曰。君子有九思。視思明。聽思聰。色思温。貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義。

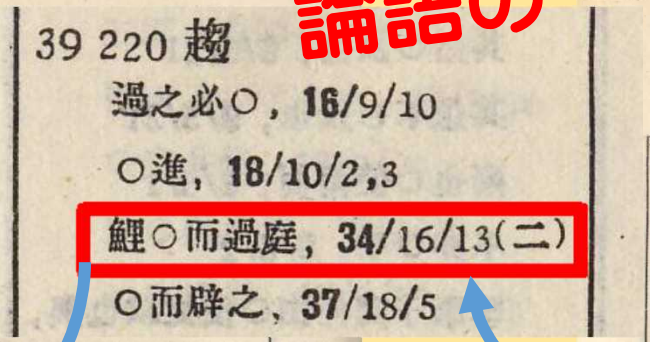
11. 孔子曰。見善如不及。見不善如探湯。吾見其人矣。吾聞其語矣。隱居以求其志。行義以達其道。吾聞其語矣。未見其人也。

12. 齊景公有馬千駟。死之日民無德[7]而[8]稱焉。伯夷叔齊餓于首陽之下。民到于今稱之。其斯之謂與。

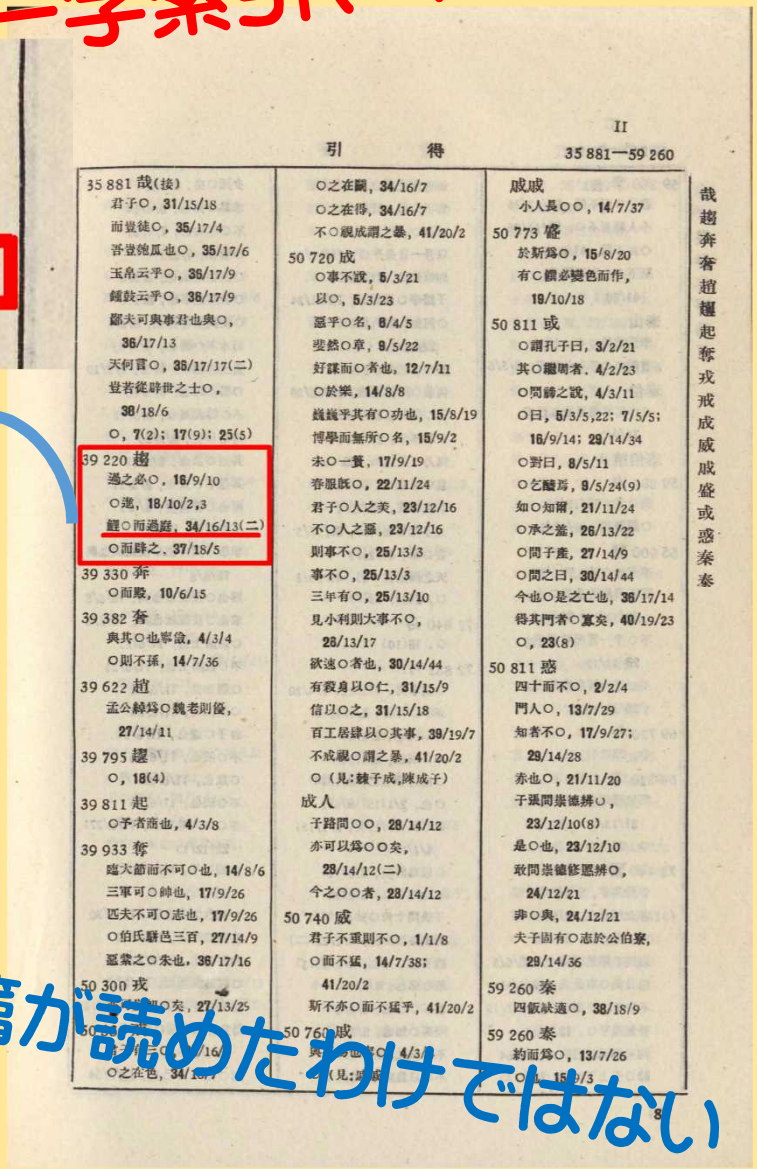
13. 陳亢[9]問於伯魚曰。子亦有異聞乎。對曰。未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰。學詩乎。對曰。未也。不[10]學詩。無以言[11]。鯉退而學詩。他日又獨立。鯉趨而過庭。曰。學禮乎。對曰。未也。不學禮。無以立。鯉退而學禮。聞斯二者[12]。陳亢退而喜曰。問[13]一得三。聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。

1. 便一作諂. 2. 佚一作逸. 3. 躁一作傲.
4. 一無而字. 5. 鬬一作鬬,又作鬬,亦作鬬. 6. 得一作德.
7. 德一作得. 8. 一無而字. 9. 亢一作伉.
10. 不上一有曰字. 11. 言下一有也字.
12. 者下一有矣字,者一作矣. 13. 問一作聞.

34



39 220 趨
過之必○, 16/9/10
○進, 18/10/2,3
鯉○而過庭, 34/16/13(二)
○而辟之, 37/18/5



引 得 II
35 881—59 260

35 881 哉(接)
君子○, 31/15/18
而豈徒○, 35/17/4
吾豈匏瓜也○, 35/17/6
玉帛云乎○, 36/17/9
鍾鼓云乎○, 36/17/9
鄙夫可與事君也與○, 36/17/13
天何言○, 36/17/17(二)
豈若從辟世之士○, 36/18/6
○, 7(2); 17(9); 25(5)

39 220 趨
過之必○, 16/9/10
○進, 18/10/2,3
鯉○而過庭, 34/16/13(二)
○而辟之, 37/18/5

39 330 奔
○而駭, 10/6/15

39 382 奢
與其○也寧儉, 4/3/4
○則不孫, 14/7/36

39 622 趙
孟公綽爲○魏老則優, 27/14/11

39 795 趨
○, 18(4)

39 811 起
○予者商也, 4/3/8

39 933 奪
臨大節而不可○也, 14/8/6
三軍可○帥也, 17/9/26
匹夫不可○志也, 17/9/26
○伯氏駢邑三百, 27/14/9
惡紫之○朱也, 36/17/16

50 300 戎
[illegible]○矣, 27/13/25
[illegible]

○之在鬬, 34/16/7
○之在得, 34/16/7
不○親成謂之暴, 41/20/2

50 720 成
○事不說, 5/3/21
以○, 5/3/23
惡乎○名, 6/4/5
斐然○章, 9/5/22
好謀而○者也, 12/7/11
○於樂, 14/8/8
錢錢乎其有○功也, 15/8/19
博學而無所○名, 15/9/2
未○一簣, 17/9/19
春服既○, 22/11/24
君子○人之美, 23/12/16
不○人之惡, 23/12/16
則事不○, 25/13/3
事不○, 25/13/3
三年有○, 25/13/10
見小利則大事不○, 28/13/17
欲速○者也, 30/14/44
有殺身以○仁, 31/15/9
信以○之, 31/15/18
百工居肆以○其事, 39/19/7
不成親○謂之暴, 41/20/2
○(見:鍾子成,陳成子)

成人
子路問○○, 28/14/12
亦可以爲○○矣, 28/14/12(二)
今之○○者, 28/14/12

50 740 威
君子不重則不○, 1/1/8
○而不猛, 14/7/38; 41/20/2
斯不亦○而不猛乎, 41/20/2

50 760 戚
與[illegible]○, 4/3/[illegible]
○(見:[illegible]

戚戚
小人長○○, 14/7/37

50 773 盛
於斯爲○, 15/8/20
有○饋必變色而作, 19/10/18

50 811 或
○謂孔子曰, 3/2/21
其○繼周者, 4/2/23
○問禘之說, 4/3/11
○曰, 5/3/5,22; 7/5/5; 16/9/14; 29/14/34
○對曰, 8/5/11
○乞醯焉, 9/5/24(9)
如○知爾, 21/11/24
○承之羞, 26/13/22
○問子產, 27/14/9
○問之曰, 30/14/44
今也○是之亡也, 36/17/14
得其門者○寡矣, 40/19/23
○, 23(8)

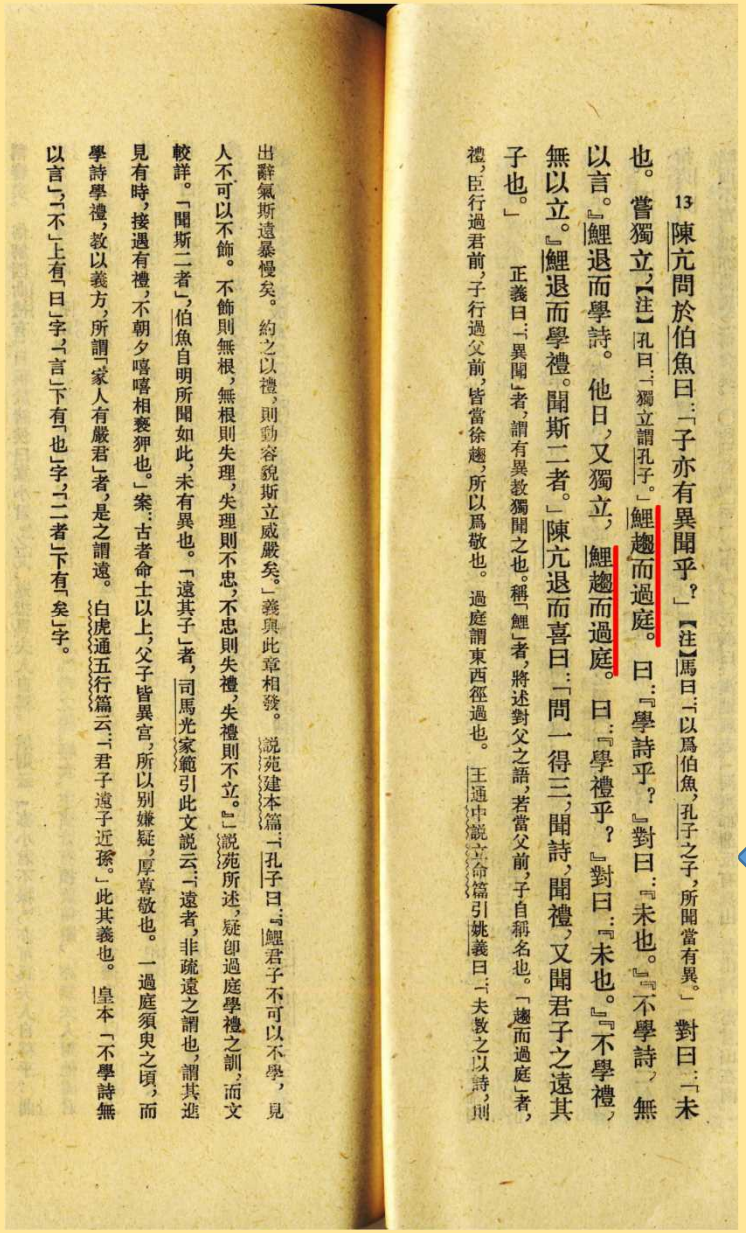
50 811 惑
四十而不○, 2/2/4
門人○, 13/7/29
知者不○, 17/9/27; 29/14/28
赤也○, 21/11/20
子張問崇德辨○, 23/12/10(8)
是○也, 23/12/10
敢問崇德修慝辨○, 24/12/21
非○與, 24/12/21
夫子固有○志於公伯寮, 29/14/36

59 260 秦
四飯缺適○, 38/18/9

59 260 秦
約而爲○, 13/7/26
○[illegible]

哉 趨 奔 奢 趙 起 奪 戎 戒 成 威 戚 盛 或 惑 秦 奏

論語季氏篇が読めたわけではない(T_T)



13 陳亢問於伯魚曰：「子亦有異聞乎？」【注】馬曰：「以爲伯魚，孔子之子，所聞當有異。」對曰：「未也。嘗獨立，【注】孔曰：「獨立謂孔子。」鯉趨而過庭。曰：『學詩乎？』對曰：『未也。』『不學詩，無以言。』鯉退而學詩。他日，又獨立，鯉趨而過庭。曰：『學禮乎？』對曰：『未也。』『不學禮，無以立。』鯉退而學禮。聞斯二者。」陳亢退而喜曰：「問一得三，聞詩，聞禮，又聞君子之遠其子也。」

正義曰：「異聞」者，謂有異教獨聞之也。稱「鯉」者，將述對父之語，若當父前，子自稱名也。「趨而過庭」者，禮，臣行過君前，子行過父前，皆當徐趨，所以爲敬也。過庭謂東西徑過也。王通中說立命篇引姚義曰：「夫教之以詩，則出辭氣斯遠暴慢矣。約之以禮，則動容貌斯立威嚴矣。」義與此章相發。說苑建本篇：「孔子曰：『鯉君子不可以不學，見人不可以不飾。不飾則無根，無根則失理，失理則不忠，不忠則失禮，失禮則不立。』」說苑所述，疑卽過庭學禮之訓，而文較詳。「聞斯二者」，伯魚自明所聞如此，未有異也。「遠其子」者，司馬光家範引此文說云：「遠者，非疏遠之謂也，謂其進見有時，接遇有禮，不朝夕嘻嘻相褻狎也。」案：古者命士以上，父子皆異宮，所以別嫌疑，厚尊敬也。一過庭須臾之頃，而學詩學禮，教以義方，所謂「家人有嚴君」者，是之謂遠。白虎通五行篇云：「君子遠子近孫。」此其義也。皇本「不學詩無以言」，「不」上有「曰」字，「言」下有「也」字，「二者」下有「矣」字。

論語の注釈書

「先生、あのう～、
論語のこの部分の解釈を
知りたいのですが<(_ _)>」
「論語の注釈書としては、
諸子集成という叢書に入っている
劉寶楠の注釈が
最も優れているでしょう(^o^)ノ」

(清) 劉寶楠撰
『論語正義』巻十九季氏篇

i (◎_◎)ハッケンシタ

そうだっ！論語には日本語訳があるはずだ！

論語の訳注書

宮崎市定訳注
『論語』
岩波現代文庫、2000年

季氏篇のエピソードが理解できた!(^^)!

でも「趨庭」が、何故、「父の教えを受ける」という意味になるのか？？？？？？？？？？

433　陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。対曰。未也。嘗独立。鯉趨而過庭。曰。学詩乎。対曰。未也。不学詩。無以言。鯉退而学詩。他日又独立。鯉趨而過庭。曰。学礼乎。対曰。未也。不学礼。無以立。鯉退而学礼。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩聞礼。又聞君子之遠其子也。

(訓)陳亢、伯魚に問うて曰く、子も亦た異聞あるか。対えて曰く、未だし。嘗て独り立つ。鯉、趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を学びたるか。対えて曰く、未だし。(曰く)詩を学ばざれば、以て言うなし、と。鯉、退いて詩を学ぶ。他日又た独り立つ。鯉、趨りて庭を過ぐ。曰く、礼を学びたるか。対えて曰く、未だし。(曰く)礼を学ばざれば、以て立つなし、と。鯉、退いて礼を学べり。斯の二者を聞く。陳亢退き、喜んで曰く、一を問うて三を得たり。詩を聞き礼を聞き、又た君子の其の子を遠ざくるを聞けり。

(新)陳亢が孔子の子の伯魚(鯉)に尋ねた。先生について何か珍しい話題をお持ちですか。対えて曰く、それほどのことでもありませんが、先日父がひとりでぼんやり立っていました。私がその前の庭を小走りで通りすぎました。詩を勉強したか、と聞かれましたので、まだです、と答えますと、詩を習わねば、物いうすべを知らぬぞ、と言われました。そこで私は自分で詩の勉強をしました。その後また父がひとりぼんやり立っていました。私がその前の庭を小走りで通りすぎました。礼を勉強したか、と聞かれましたので、まだです、と答えますと、礼を習わねば世間で一人前とされぬぞ、と言われました。そこで私は自分で礼の勉強をしました。このくらいのことです。陳亢は退出してから大喜びで話した。一つの質問で三つの知識を得た。詩のことを知り、礼のことを知り、先生は自分の子に手をとって教えないことを知った。

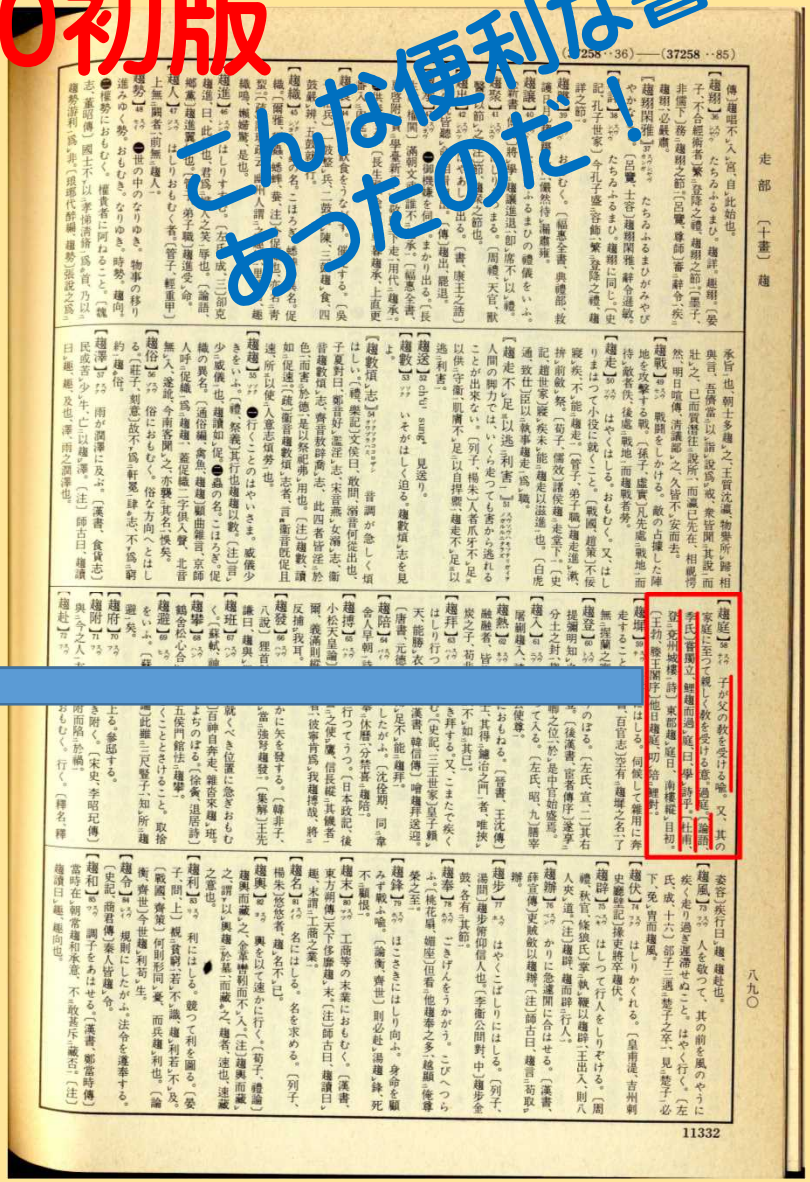
諸橋轍次『大漢和辞典』
大修館書店、1960初版

こんな便利な書物があったのだ！

辞書は用例が命！

【趨庭】58 スウテイ 子が父の教を受ける喩。又、其の家庭に至つて親しく教を受ける意。過庭。〔論語、季氏〕嘗獨立、鯉趨而過レ庭、曰、學レ詩乎。〔杜甫、登三兗州城樓一詩〕東郡趨レ庭日、南樓縱レ目初。〔王勃、滕王閣序〕他日趨庭、叨陪三鯉對。

【趨堀】59 スウチ 庭前にはしる。伺候して雑用に奔



中国・日本における先学たちの
研鑽による
知の集積の一つとして、
このような大部な辞典が編まれ、
熟語一つ一つに、
適切・妥当な意味が
与えられていった。

以後、発表者は、日本語の（全）訳注のない詩人（高適・孟浩然・李頎）の研究に取り組むことになる。
大漢和辞典、漢語大詞典、佩文韻府（詩語の大辞典）、各一字索引、日中の注釈書などにより、
典故の解明が中国古典詩読解における大部分を占める作業となる。

大漢和辞典、漢語大詞典、佩文韻府などの
辞書掲載の用例で調査を済ませることは許されず、
必ず、**辞書の用例の原典にあたり確認する**ことが求められる。
一字索引のない書物は、頭から該当部分を探し、見つけ出す必要もある。

パーソナルコンピュータ
インターネット時代の到来！

中国・台湾において、重要書籍のデータベース化が急速に進められ、
膨大な種類の書籍のデータベース検索が可能となっている。
データベースはフリーのウェッブサイトや有料のソフトで供給されている。
典故の出典の検索等に費やした時間を、
研究の深化・進化に充てることができるようになった。
但しそれでも出典を理解できたわけではない(^^ゞ

凱希メディアサービス

雕龍古籍全文検索叢書『十三経注疏索引』

雕龍―古籍全文檢索叢書(十三經)

ファイル(F)　編集(E)　表示(V)　一覧　ヘルプ(H)

目録　検索

キーワードを入力して下さい。

趨而過庭　検索

☑ 簡繁・中日等の異体字の関連

検索方法：
◉ and　○ or

検索対象：
◉ 全文　○ 正文　○ 注釈

検索範囲：
十三經之白文

全部で 1 頁で、2 箇所でした。

類別	書名	巻	頁
十...	論語	季...	220

1 /1

之辭。丘也聞有國有家者。不患寡而患不均。不患貧而患不安。蓋均無貧。和無寡。安無傾。夫如是。故遠人不服。則脩文德以來之。既來之。則安之。今由與求也。相夫子。遠人不服。而不能來也。邦分崩離析。而不能守也。而謀動干戈於邦內。吾恐季孫之憂。不在顓臾。而在蕭牆之內也。

孔子曰。天下有道。則禮樂征伐。自天子出。天下無道。則禮樂征伐。自諸侯出。自諸侯出。蓋十世。希不失矣。自大夫出。五世。希不失矣。陪臣執國命。三世。希不失矣。天下有道。則政不在大夫。天下有道。則庶人不議。

孔子曰。祿之去公室五世矣。政逮於大夫四世矣。故夫三桓之子孫微矣。

孔子曰。益者三友。損者三友。友直。友諒。友多聞。益矣。友便辟。友善柔。友便佞。損矣。

孔子曰益者三樂。損者三樂。樂節禮。樂樂道人之善。樂多賢友。益矣。樂驕樂。樂佚遊。樂宴樂。損矣。

孔子曰。侍於君子有三愆。言未及之而言。謂之躁。言及之而不言。謂之隱。未見顏色而言。謂之瞽。

孔子曰。君子有三戒。少之時。血氣未定。戒之在色。及其壯也。血氣方剛。戒之在鬬。及其老也。血氣既衰。戒之在得。

孔子曰。君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。小人不知天命。而不畏也。狎大人。侮聖人之言。

孔子曰。生而知之者。上也。學而知之者。次也。困而學之。又其次也。困而不學。民斯為下矣。

孔子曰。君子有九思。視思明。聽思聰。色思溫。貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義。

孔子曰。見善如不及。見不善如探湯。吾見其人矣。吾聞其語矣。隱居以求其志。行義以達其道。吾聞其語矣。未見其人也。

齊景公有馬千駟。死之日。民無德而稱焉。伯夷叔齊。餓于首陽之下。民到于今稱之。其斯之謂與。

陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。對曰。未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰。學詩乎。對曰。未也。不學詩。無以言。鯉退而學詩。他日。又獨立。鯉趨而過庭。曰。學禮乎。對曰。未也。不學禮。無以立。鯉退而學禮。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩。聞禮。又聞君子之遠其子也。

邦君之妻。君稱之曰夫人。夫人自稱曰小童。邦人稱之曰君夫人。稱諸異邦曰寡小君。異邦人稱之。亦曰君夫人。

十六

中国古典詩に対する伝統的な注釈態度

①制作背景の解明
・作者の伝記的考証
・制作場所や詩歌に詠み込まれた場所の地理的考証
②典故の出典の解明
・詩意の解釈には、重きを置かれなかった。

中国の現代の研究者による注釈書も、上記二点に比重を置いている。
作品を現代語訳したものは、まだまだ少ない。

謝思煒『杜甫集校注』(上海古籍出版社、2015年)

登兖州城樓〔一〕

東郡趨庭日〔二〕，南樓縱目初。浮雲連海岱㊀，平野入青徐〔三〕。孤嶂秦碑在，荒城魯殿餘〔四〕。從來多古意，臨眺獨躊躇〔五〕。（0429）

【校】

① 岱，錢箋作「岳」，校：「一作岱。」

【注】

黄鶴注：公以開元二十四年前下第後游齊趙，此當作於開元二十九年（七四一）前。仇注繫於開元二十五年（七三七）。

〔一〕兖州：《元和郡縣圖志》卷一〇：「兖州，魯郡。中都督府。」《舊唐書・地理志》：「兖州，上都督府。隋魯郡。……天寶元年，改兖州爲魯郡。乾元元年，復爲兖州。」

〔二〕東郡句：《漢書・地理志》：「東郡，秦置。莽曰治亭。屬兖州。」《論語・季氏》：「嘗獨立，鯉趨而過庭，曰：『學詩乎？』對曰：『未也。』『不學詩，無以言。』」鯉，孔子之子。《草堂》夢弼注：「公父閑嘗爲兖州司馬，公時省侍之。」

〔三〕浮雲二句：《書・禹貢》：「海岱惟青州。」傳：「東北據海，西南距岱。」《元和郡縣圖志》卷一〇河南道：「青州，北海，望。」卷九河南道：「徐州，彭城。上。」青州在兖州北，徐州在兖州南。

〔四〕孤嶂二句：《水經注》泗水：「《地理志》：嶧山在鄒縣北。……山北有絶岩，秦始皇觀禮於魯，登於嶧山之上，命丞相李斯以大篆勒銘山嶺，名曰書門。」《元和郡縣圖志》卷一〇兖州鄒縣：「嶧山，一名鄒山，在縣南二十二里。……秦始皇二十六年，觀禮於魯，刻石於嶧山。」《水經注》泗水魯縣：「孔廟東南五百步有雙石闕，即靈光之南闕，北百餘步即靈光殿基，東西二十四丈，南北十二丈，高丈餘。東西廊廡別舍，中間方七百餘步。……是漢景帝程姬子魯恭王之所造也。」《元和郡縣圖志》卷一〇兖州曲阜縣：「靈光殿，魯王所造，在魯城内。案《文選》，漢景帝子名餘，封爲魯王，好理宫室，而建此殿。遭王莽亂，宫室被焚，建章皆隳壞，而靈光殿巋然獨存。」

〔五〕臨眺句：張衡《思玄賦》：「躔建木於廣都兮，摭若華而躊躇。」《文選》李善注：「《韓詩》曰：愛而不見，搔首躊躇。薛君曰：躊躇，躑躅也。《廣雅》曰：躊躇，猶豫也。」

さて、杜甫「登兗州城楼」に戻って。

登兗州城楼（兗州の城楼に登る）

五言律詩。河南・山東に放浪生活を送っていたころ、兗州都督府司馬の官にあった父の杜閑を訪れた折の詩。七四二（天宝元）年、三十一歳のころの作。

東郡趨庭日　東郡　庭に趨する日
南楼縱目初　南楼　目を縱ままにする初め
浮雲連海岱　浮雲は海岱に連なり
平野入青徐　平野は青徐に入る
孤嶂秦碑在　孤嶂には秦碑在り
荒城魯殿余　荒城には魯殿余る
従来多古意　従来　古意多し
臨眺独躊躇　臨眺して独り躊躇す

東郡の地で父の教えを奉じている日にあって、州城の南楼で眺めをほしいままにするその初めのときよ。空に浮かぶ雲は海や泰山のかなたにまでつらなり、平野は青州や徐州の方まで入りこんでいる。ひとりそばだつ屏風山には秦の始皇帝の石碑が今なお残っており、荒れはてた町には魯王の宮殿がそのあとをとどめている。これまで古をなつかしむ気持ちの多かったわたしは、城楼に登り立って四方を眺めながらひとりたち去りかねている。

○東郡　秦のときの郡名で、兗州はその郡に属していた。○趨庭　庭さきを走りまわる。『論語』季氏篇に、孔子の子の鯉が「庭を趨って」過ぎたとき、父の孔子が呼びとめて「詩」と「礼」とを学ぶようにさとしたとあるのにもとづき、子供が父の教えを受けることをいう。この『論語』のことばを使用するのは、兗州のすぐ東に孔子の故郷である曲阜があることによる。○海岱　東の海と東北にそびえる泰山のこと。○青徐　青州と徐州。ともに太古の九州の一つで、青州は兗州の北、徐州は兗州の南にひろがる地域をいう。『書経』禹貢篇に「海岱は惟れ青州」とある。○孤嶂　兗州の東南数十キロにある嶧山をいう。○秦碑　紀元前三世紀のころ、秦の始皇帝が巡幸の記念として建てた石碑。○荒城　兗州のすぐ東にある曲阜をさす。○魯殿　紀元前二世紀、漢の景帝の息子、魯の共王が建てた霊光殿をいう。○臨眺　高い所に登って遠くをながめる。○躊躇　躊躇。行くことをためらう。○韻字　初・徐・余・躇。

「趨庭」の詩学

①父のもとに居ることを、そのまま「父のもとに居る」と表現してしまうのは、少なくともこの場合、詩の言語ではない。
②それを、典故という修辞技法を使って、如何に表現するか？
③黒川注にもあるように、制作場所が孔子の郷里の曲阜の近くであるから、『論語』が典故として、杜甫に思いつかれたことは首肯できよう。
④ならば「趨庭」によって、作品世界がどうなっているのか？
⑤真摯な儒教信奉者であった杜甫にとって、自らの父子関係を孔子とその子に喩えるのは、理想の表白であったかもしれない。
⑥少なくとも、この作品に典雅な雰囲気を醸し出すことに成功しているであろう。
⑦あるいは、杜甫と父の杜閑との関係は、孔子と子の鯉との関係の如く、父が子を手取り足取り訓育するのではなく、比較的冷淡な、突き放した関係であったかもしない。

でっ？

ここからやっと
現代典故論
f^_^;)

典故使用による
意味・解釈の不変性・安定性

出典が、儒教経典のような権威ある基礎的教養書であるならば、その書物にかかる解釈・意味は不変であり、安定しておいる。少なくともそう信じられていた。
それを典故として作品に使用することにより、
解釈・意味のレベルにおいて、
作品、少なくとも典故を使用した詩句が、
不変性・安定性有することになる。
つまり、出典が、その作品が制作された時の意味を、以前から持ち続け、これからも変わらずに持ち続けるということであるのだから、
それを典故として使用することによって作品や詩句に与えられた当初の意味は、当初のまま解釈されるという不変性・安定性が期待されるのである。

（参考）大衛・拉特莫（David Lattimore）「引喩与唐詩（Allusion and T'ang Poetry）」P. 119、倪豪士編選『美国学者論唐代文学』（上海古籍出版社、1994. 12）所収

中国古代の伝統的知識人層という、原則として同じ水準の知識を共同する集団は、
解釈共同体であり、
共通教養の範囲における典故の使用は、
作者・読者に、
同じ意味・解釈を保証するプロトコル（約束事）なのであった。
共通教養から逸脱しない限り、どのような典故を用いようとも、作者の意図は、読者に正確に伝わるという前提が存在した。

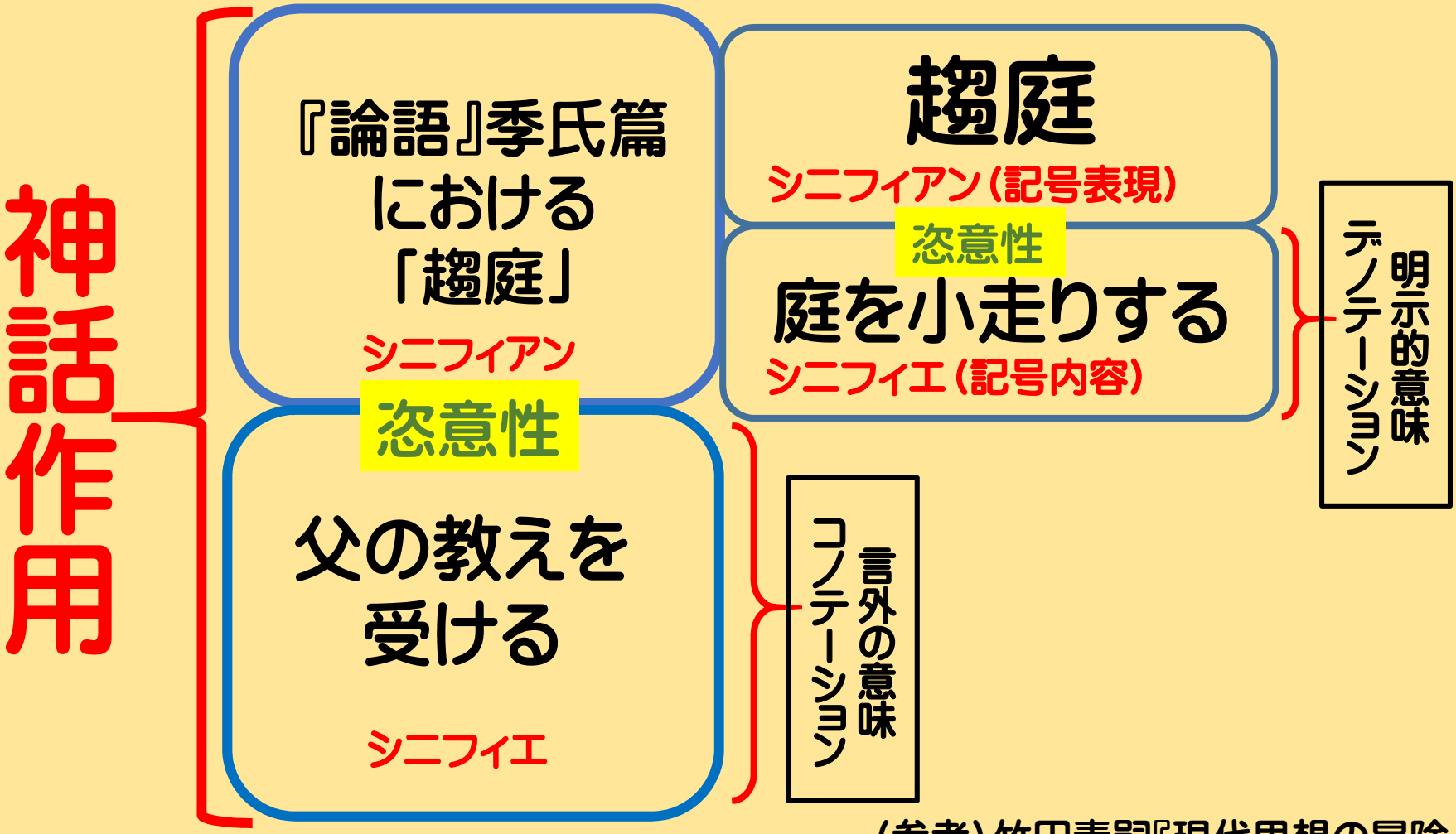
逆説の典故

現代の私たちに重要なことは、そのようなヘルメティックな解釈共同体から、作品が解放されたということである。
解釈共同体の中にあってこそ、典故の使用によって、作品の意味・解釈に不変性・安定性が保証されていた。

その保証が担保されない世界に向かって作品が開かれてしまったのである。この事象は、近代のメルクマールであるか？

伝統的知識人が死滅してしまったあとの時代の私たちは、解釈共同体の中では常識、暗黙の了解であったプロトコル（約束事）、即ち典故を解明しなければ、作品を解釈できない。
例えば極めて基礎的知識であったと判断できる『論語』季氏篇「趨庭」にも注釈が必要となった。
解釈共同体において解釈・意味の保証をしていた典故が、却って、作品読解の牆壁・障壁となってしまったのである。

典故の神話作用の見取り図



（参考）竹田青嗣『現代思想の冒険』ちくま学芸文庫、1992

神話化＝意味の不朽性＝解釈の不朽性

コノテーションのデノテーション化

趨庭

シニフィアン（記号表現）

恣意性？

庭を小走りする
父の教えを受ける

シニフィエ（記号内容）

デノテーション

「趨庭」は、
「庭を小走りする」という意味ではなく、
「父の教えを受ける」意味として、
中国古典語の語彙として定着する。

固有名詞：空虚あるいは無限大のシニフィアン

固有名詞
「玲奈」
シニフィアン

φ　∞
シニフィエ

固有名詞は、一般概念としてのシニフィエを持たず、個物や個人を直接的に指し示す。
「玲奈」は、それを名前とする全ての人を指し示しているのではない。
自分が知っている「玲奈」を指し示す。

恣意的ではない＝名付け

明示的意味
デノテーション

固有概念は、一般概念を持たない点で明示的意味が記述できない、記述し尽くせない。
その意味で、φであり∞である。
意味の下位分類的、説明的記述が不可能である。
「「玲奈」ではない人以外の人」と、定義するしかない。

（参考）立川健二『現代言語論』新曜社、1990

固有名詞：空虚あるいは無限大のシニフィアン

陶淵明『五柳先生傳』
先生不知何許人也。亦不詳其姓字。
宅邊有五柳樹、因以爲號焉。

シニフィエとシニフィアンの関係が
極めて
偶然性・恣意性を有している点で、
一般名詞に近似する。
住まいのあたりに柳が三本だったら
「三柳先生」となったか？
by三流先生(^^ゞ
白い猫を「シロ」と名付けることとの違い？

固有名詞：空虚あるいは無限大のシニフィアン

「五柳先生傳」全文

先生不知何許人也。亦不詳其姓字。宅邊有五柳樹。因以爲號焉。閒靜少言。不慕榮利。好讀書。不求甚解。每有會意。欣然忘食。性嗜酒。家貧不能恆得。親舊知其如此。或置酒而招之。造飲輒盡。期在必醉。既醉而退。曾不吝情去留。環堵蕭然。不蔽風日。短褐穿結。簞瓢屢空。晏如也。常著文章自娛。頗示己志。忘懷得失。以此自終。

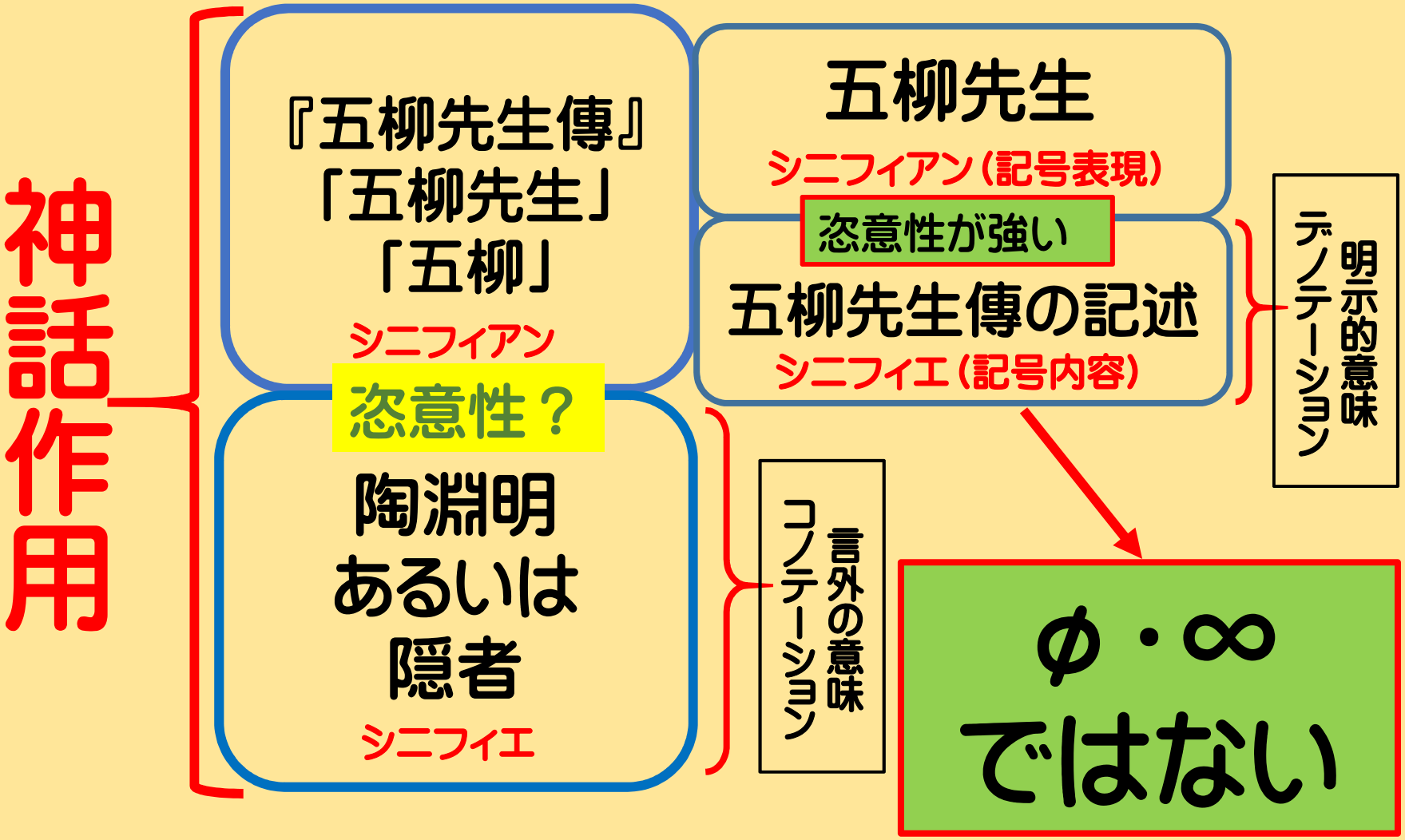
贊曰。

黔婁有言。不戚戚于貧賤。不汲汲于富貴。其言茲若人之儔乎。酬觴賦詩。以樂其志。無懷氏之民歟。葛天氏之民歟。

固有名詞である「五柳先生」を説明し尽くしてしまっている！

「五柳先生」は、これ以上・以下でもない。

固有名詞：空虚あるいは無限大のシニフィアン



固有名詞：空虚あるいは無限大のシニフィアン

「φでもなく、∞でもない
固有名詞の生成」
結論は出ないが、
陶淵明の言語世界を
このような視座から分析することは
可能であろうか？
いま少し考えなければならない。

【注】
なお「五柳先生」の名付けが、一般の命名に比べて、恣意性が強いことは、
国際文化学研究科大学院生・馬木浩二「陶淵明研究」が言及している。
（平成28年度「国際文化学研究法」20160201発表会）
この着想については、本研究科・特別研究「国際文化学研究」（修士論文指導）において、
発表者が馬木氏に教示したものである。

Have a break！

暗黒のシニフィアン

頻繁に、デング熱についてパンデミックのように報道される。
視聴者は、デング熱が日本の最重大事だという情報を受け取る。

シニフィアン（記号表現）

連日のデング熱報道

シニフィアン（記号表現）

デング熱が流行している

シニフィエ（記号内容）

特殊な意図

？

シニフィエ（記号内容）

デング熱があれほどまでに連日テレビ報道のトップニュースになる必要があったのか？
そうではなかったことが結果が物語っている。

では、なぜテレビ報道は、デング熱に熱心だったのか？
視聴者の関心を、あることから、デング熱に向けておくという情報操作が行なわれたのではないか？

インターテクスチュアリティーの視点から典故を考える(1)

インターテクスチュアリティーとは、
テクストの意味を
他のテクストとの関係性において考察する
という思考の枠組み。
すべてのテクストは、それに先行するテクストからの引用によって成立している。
無から生産されるテクストは、存在しない。
例えば、一編の小説において、作者の生活史が、言語・記憶・経験など、様々なレベルで織りなされているはずである。
この場合、テクストは、文学作品に限定されない。
テクストとは、全ての事象である。

インターテクスチュアリティーの視点から典故を考える(2)

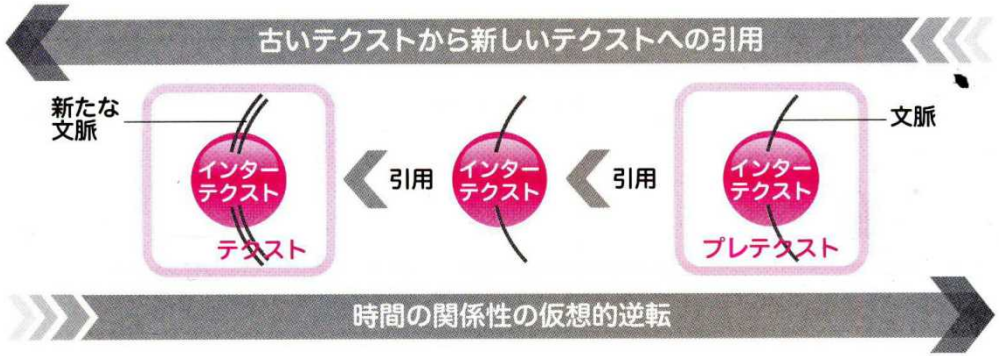
インターテクスチュアリティー

異文化経験を考察する思考の枠組みとして、まずインターテクスチュアリティーについて説明する。まずこの説明に必要な三つの術語を示す。

①プレテクスト（pretext）＝先行するテクスト（＝引用元）

②インターテクスト（intertext）＝引用されたテクスト（＝引用されるもの）

③　　テクスト（context）＝引用がなされるテクスト（＝引用先）



①『論語』季氏篇

②「趨庭」

③杜甫詩

グローバル人材育成支援言語学習プログラムチーム『多言語プレゼンテーションプラスアルファ+α』東洋図書出版、2015年、川口執筆分
201611一部修正

『論語』→「趨庭」→杜甫詩(1)

儒教の経典であり、儒教の開祖・孔子の言行録である『論語』の季氏篇(①)に見える、
孔子とその子・鯉のエピソードにある「鯉趨而過庭」と言う部分が、
「趨庭」と変形され(②)、
杜甫詩(③)に引用された。

『論語』→「趨庭」→杜甫詩(2)

出典において「庭を小走りして通り過ぎる」という意味であった部分は、
孔子が我が子の教育をするという文脈に置かれていた。
この部分は、
孔子(父)の孔鯉(子)に対する教育態度というエピソードの文脈を保持しながら、
杜甫詩に引用された。

『論語』→「趨庭」→杜甫詩(3)

そして、引用された部分は、
杜甫詩では、
杜甫(子)が杜閑(父)を訪ねるという新たな文脈に置かれ、
「庭を小走りする」という意味でしかなかった「趨庭」が、
「父のもとを訪ねる、父のもとに居る」という意味に変容し、新たな意味を生成した。

ここに、わたしたちは、

神話化＝意味の不朽性＝解釈の不朽性
コノテーションのデノテーション化

という機制の内幕を観察することができたのである。

と、ひとまず、
しておいて下さい
<(_ _)>

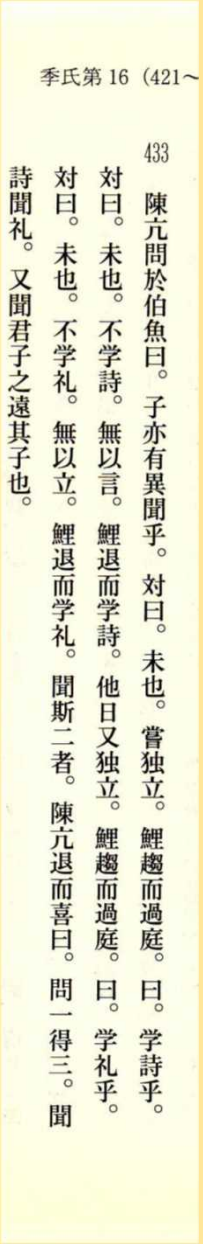
杜甫詩→「趨庭」→『論語』(1)

433 陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。対曰。未也。嘗独立。鯉趨而過庭。曰。学詩乎。対曰。未也。不学詩。無以言。鯉退而学詩。他日又独立。鯉趨而過庭。曰。学礼乎。対曰。未也。不学礼。無以立。鯉退而学礼。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩聞礼。又聞君子之遠其子也。

「趨庭」が「父の教えを受ける」という意味に変容して引用された杜甫詩が、
逆に『論語』季氏篇のエピソードに、
どのような影響を与えているのか。

という考え方はできないであろうか？

杜甫詩→「趨庭」→『論語』(2)


季氏第 16（421～

433 陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。対曰。未也。嘗独立。鯉趨而過庭。曰。学詩乎。対曰。未也。不学詩。無以言。鯉退而学詩。他日又独立。鯉趨而過庭。曰。学礼乎。対曰。未也。不学礼。無以立。鯉退而学礼。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩聞礼。又聞君子之遠其子也。

私たちが杜甫詩を経験したあとに、
『論語』季氏篇を読んだ時、
杜甫詩を読む前とは違った読み方を、
そこに発見することはできないであろうか？

という考え方はできないであろうか？

杜甫詩→「趨庭」→『論語』(3)

433 陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。対曰。未也。嘗独立。鯉趨而過庭。曰。学詩乎。対曰。未也。不学詩。無以言。鯉退而学詩。他日又独立。鯉趨而過庭。曰。学礼乎。対曰。未也。不学礼。無以立。鯉退而学礼。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩聞礼。又聞君子之遠其子也。

ここで、「趨」は、
前掲の『論語正義』に「趨而過庭者、禮。臣行過君前、子行過父前、皆當徐趨、所以爲敬也。」とあるように、
尊敬する者の前を通り過ぎるときの謙譲の動作である。
孔子の子である孔鯉も父への敬意として「趨」した。

杜甫詩 → 「趨庭」 → 『論語』(4)

登兗州城楼（兗州の城楼に登る）

五言律詩。河南・山東に放浪生活を送っていたころ、兗州都督府司馬の官にあった父の杜閑を訪れた折の詩。七四二(天宝元)年、三十一歳のころの作。

東郡趨庭日　東郡　庭に趨する日
南楼縦目初　南楼　目を縦ままにする初め
浮雲連海岱　浮雲は海岱に連なり
平野入青徐　平野は青徐に入る
孤嶂秦碑在　孤嶂には秦碑在り
荒城魯殿余　荒城には魯殿余る
従来多古意　従来　古意多し
臨眺独躊躇　臨眺して独り躊躇す

東郡の地で父の教えを奉じている日にあって、州城の南楼で眺めをほしいままにするその初めのときよ。空に浮かぶ雲は海や泰山のかなたにまでつらなり、平野は青州や徐州の方まで入りこんでいる。ひとりそばだつ屏風山には秦の始皇帝の石碑が今なお残っており、荒れはてた町には魯王の宮殿がそのあとをとどめている。これまで古をなつかしむ気持ちの多かったわたしは、城楼に登り立って四方を眺めながらひとりたち去りかねている。

433 陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。対曰。未也。嘗独立。鯉趨而過庭。曰。学詩乎。対曰。未也。不学詩。無以言。鯉退而学詩。他日又独立。鯉趨而過庭。曰。学礼乎。対曰。未也。不学礼。無以立。鯉退而学礼。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩聞礼。又聞君子之遠其子也。

でっ？

杜甫詩→「趨庭」→『論語』(5)

わからん！

(^^♪

杜甫詩→「趨庭」→『論語』(6)

杜甫詩の「趨庭」が、作品全体の尚古的な厳かな雰囲気の中に位置するのに対して、論語の「鯉趨而過庭」は日常の一コマという文脈の中に置かれている。

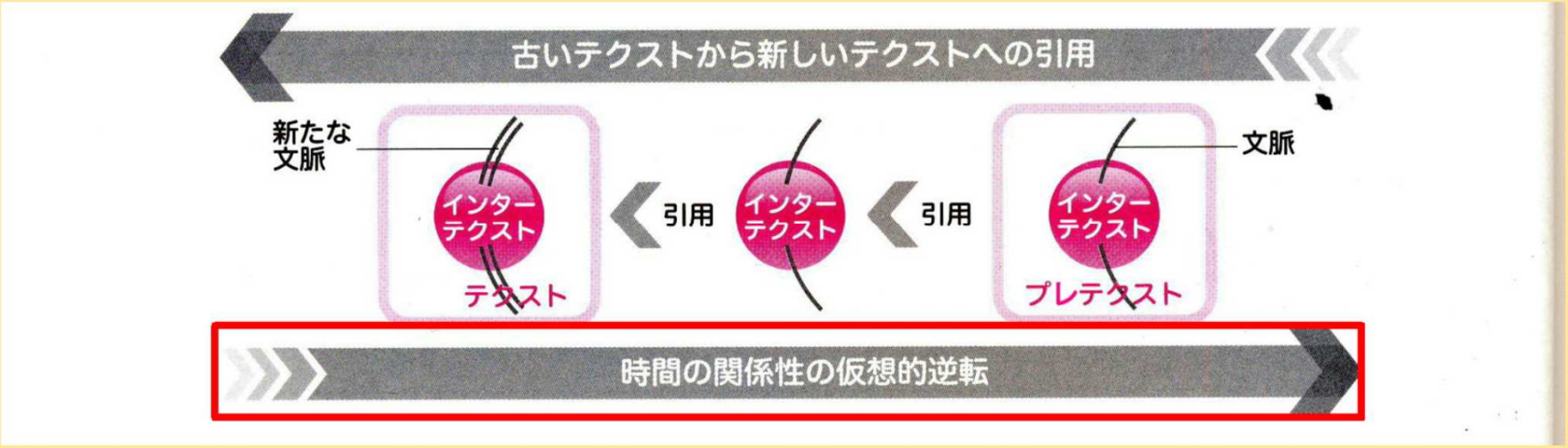
この対比によって、『論語』の「鯉趨而過庭」は、杜甫詩の「趨庭」の重みとは違った「軽さ」が浮き上がることになる。

杜甫詩→「趨庭」→『論語』(7)

基礎的教書である『詩』や『礼』を学んでいないことを父・孔子に咎められた「趨」する子・孔鯉は、
敬意の態度を表面的には身に付けているが、そこに内実が伴っていないことを父・孔子に見透かされているのだ、という光景を、
私たちは読み取ることもできるだろう。

もとより、父・孔子が、子・孔鯉の「趨」の儀礼が内実の伴わない表面的なものに過ぎず、
それを見透かした孔子が、孔鯉に『詩』と『礼』とを学ぶように諭したという解釈は、『論語』のテクスト自体に内在する意図であるとも考え得る。
たとえそうであったとしても、杜甫詩の「趨庭」によって、その意図がいっそう明確にで具現化したと考えることは、不当ではなかろう。

杜甫詩というテクストが、
「趨庭」というインターテクストによって、
『論語』というプレテクストの
意味・解釈を創出し、変質させている
と捉えることができる。



結局、何が言いたいかというと、「典故」という思想においては、古い書物から、新しい作品という「一方向」性のベクトルしかなかったが、
インターテクスチュアリティーという考え方を持ち込むことによって、テクストの引用の相互関係は、
新しい作品から、古い書物の意味・解釈を変容させる・揺さぶる可能性を獲得することになるのである。
後続のテクスト（テクスト・引用先）が、先行のテクスト（プレテクスト・引用元）を変容させるのである。

インターテクスチュアリティーの視点から典故を考える(3)

典故に限定した場合、テクストの読者が、プレテクストを知らなければ成立しない。

しかし、インターテクスチュアリティーを、プレテクスト→テクストの一方通行的に考えるのは、その思考の可能性を抹消してしまう。
「INTER」とは、「相互」「間」「中」という意味である。
例えば、プレテクストについて未知で且つテクストを知っている読者が、プレテクストを見て、テクストを想起するという現象があり得ることである。
これは、インターテクスチュアリティーにおいて、仮想的に、プレテクスト・テクストの関係が逆ベクトルになったといえる。
また、プレテクストから、テクストに引用され、テクストから逆照射されて、プレテクストが新たな意味を持ち出すこともあり得るのである。
後続のテクストが先行のテクストの「読み」を変質させたり、そのイメージを作り変えるといったことは、ごく普通に生じていることである。

インターテクスチュアリティーの考え方は、テクストどうしの相対性にポイントがあるべきである。

ところで先に「とひとまずしておいて下さい<(_ _)>」とした。
実は『論語』から「趨庭」を引用したのは、杜甫詩が最初ではない<m(__)m>。
唐以前にすでに、陳・姚最「續畫品」「陸肅」「右綏之弟。久藉趨庭之教。未盡敦閲之勤。」、隋・孫萬壽「答楊世子詩」「趨庭遵教義、博物兼文史。」とある。
「趨庭」という詩語創出のプライオリティは、杜甫詩にはないが、杜甫詩が、「趨庭」の意味の安定化に果たした役割は、杜甫詩の後世への影響を考えると、決して小さくはないだろう。

実は、『論語』季氏篇のエピソードを「過庭」として引用する用例は、「趨庭」よりも早く存在していた。
後漢・丁廙「蔡伯喈女賦」「參過庭之明訓、才朗悟而通玄。」、魏・曹操「善哉行」「自惜身薄祜、夙賤罹孤苦。既無三徙教、不聞過庭語。」

今、十分な準備はないが、「過庭」がクリシェ化して、「趨庭」が創出されたと推測できる。
先に述べたように「趨庭」の「趨」の方が「過」よりも言葉としてエピソードに「効いている」。いわゆる「字眼」である。このことは、これ以上説明不可能である。

もっと大胆な推測が許されるならば、
『論語』季氏篇の「鯉趨而過庭」の「趨」は、
本来、敬意の表現の作法ではなく、
ただ単に子供の稚気として庭を走って父の前を
通り過ぎただけかもしれない。
『詩』『礼』をまだ学んでいない年齢であった孔鯉
にあっては、この稚気は存在したであろう。
「趨」に謙譲の意味がなければ、
「過庭」が詩語として成立したのは当然であろう。

検証を待たなければならないが、
「趨庭」という語彙の登場は、
「趨」に敬意の動作の意味が付加されたことと
関係するかもしれないという
「仮説」をひとまず立てることもできる。

後続のテクストが
インターテクストを介して
プレテクストの意味を変容させるということは
ほんとうは
知のアルケオロジーとして
上記の仮説を証明する必要があることは
承知している。

この仮説証明には、
論語をはじめとする
儒教経典における「趨」の注釈史を
丹念に調査する必要がある。
多岐亡羊の困難が予想されるが、
今後の課題としたい。

まとめに代えて

典故であれ、引用であれ、
インターテクスチュアリティーであれ、
その枠組みを支えているのは、
二つのテクスト間の時間的先後関係である。
しかし、その枠組みを破壊する出来事は、
登場しないのであろうか。
同時に生成されたテクストが、
インターテクスチュアリティーの関係性を
構築していることはないのであろうか？
今後の課題としたい。

参考文献

・『文芸用語の基礎知識'85四訂増補版』「引用」（至文堂、1985.4）

・テリー・イーグルトン『文学とは何か』（岩波書店、1985.10）

・宇波彰『引用の想像力』II「引用の想像力」（冬樹社、1991.5）

・石原千秋ほか『読むための理論』「テクスト」「引用」「作家論」
（世織書房、1991.6）

・前田愛『増補文学テクスト入門』「インターテクスチュアリティ」
（筑摩学芸文庫、1993.1）

・宇波彰『記号論の思想』II「模倣と引用の世界」
（講談社学術文庫、1995.3）

・土田・神郡・伊藤『現代文学理論　テクスト・読み・世界』
（新曜社、1996.11）

ご静聴、
ありがとう
ございました
_(._.)_

でっ？